

# 英語教師に求められるもの -外国語学習方略の動機付け観点からの考察-

水野 知津子\*

## What English Language Teachers Should Understand and Acquire to Motivate Their Students to Become Autonomous Successful Language Learners.

Chizuko MIZUNO

### Abstract

Teaching situations have been changing as they become more demanding. English language Teachers need to promote their students' English abilities and enable them to communicate with people in the world in English. It is useful for the teachers to understand how important their roles are and what they should acquire to achieve their goals. Motivation is very important and helpful to develop students' abilities. Some studies show what motivation strategies work efficiently in language teaching. Teachers' development ensures their students' success.

*Key Words:* motivation, teachers' roles, metacognitive strategies, autonomous learning English

### 1. はじめに

英語教育において英語教師の役割は大きい。英語授業の内容は教師によって決まる(金谷、1995)とも言え、英語教師には多くのことが求められる。他教科の教師に比べて英語教師の学習者への影響は大きく、学生が英語を好きになるかどうかは教師によって決まる割合が高い(水野、1999)。グローバル化した国際社会で英語力は不可欠であり、世界で生き残るには世界中の人々と自由にかつ対等にコミュニケーションができる能力を持つことが求められている。英語教師に求められるものは何であろうか。

日本の英語教育の一層の質の向上が求められているが、日常生活で英語とほとんど接する機会のない日本で英語学習に成功するにはどのような方法があるのだろうか。英語教師は何を理解し、どのように指導していくべきなのであろうか。竹内(2010)は外国語の習得には日常不断の努力が必要で、学習者が自ら目標を設定し、環境を整備し、活動をおこない、その成否の責任を負う自立学習(Autonomous Learning)が重要であると述べている。自立学習の基礎となる学習計画や環境整備に関係する方略「メタ認知」の観点、特に動機づけを中心にしてグローバル化した国際社会で活躍できる学習者を育てるために何が必要なのか、英語教師に求められるものはどういったものなのか、について考察をして深め、高専での英語

\*香川高等専門学校詫間キャンパス 一般教育科

指導にどのように生かすことができるのかについても考えていきたい。

## 2. 英語教師に求められる条件

英語教師は外国語学習成功者であり、その経験を伝え、学びながら学生にとって良いモデルであることが望まれる。英語教師には英語力はもちろん、多くのものが求められている。土屋 (1995) は英語教師の求められる能力として4つの要件を示している (p.35,1995)。

- 1) 英語の運用力
- 2) 言語と文化の知識
- 3) 教え方
- 4) 人格的特性

英語教師は英語力だけでなく、英語という言語とその文化に精通しているべきである。グローバル化の現在においては、様々な国とその文化をある程度理解しておく必要がある。日本語・日本文化との対比において指導する視点も必要である。また、高い英語運用能力、豊富な英語と文化に関する知識があり、教え方が上手であっても、仕事に対する情熱や生徒の反応に対する感受性、人間的魅力といった人格が何よりも大切である (土屋、1995)。

久村・神保 (2007) は公的に求められている力として、英語力は英検準1級程度以上で、英語で授業を行える力をあげ、教授力に関しては「英語改善懇」の報告書 (2001) を要約して次の8つの項目を挙げている (p.10)。

- 1) 英語学習の動機を高める
- 2) 学校段階に応じた適切な教材および指導方法を工夫する
- 3) 国際社会で日本及び日本人が果たすべき役割について認識させる
- 4) 学習指導要領に示された内容に習熟させる

る

- 5) 積極的に英語を使って意思疎通を図ろうとする意欲を生み出す
- 6) コミュニケーションの技術としての英語力を育成する
- 7) 生徒や授業のねらいなどに応じてさまざまな指導が行えるような総合的実践力を備える
- 8) IT 機器などを利用して、生徒が表現力を高める機会を増やす

上記の英語教員の英語力と授業力の基準については、全国の中学・高校の英語教員を対象にした質問紙による調査を行っている。「英語力の基準」は設定できると判断する教員は全国に30%程度おり、「授業力の基準」では、中堅教員と初任者の基準に概ね20~30ポイント以上の差があった。中堅教員の基準はできつつあるが、初任者や指導教員の基準は今後策定する必要があるとしている。

授業力の8項目の内容には「動機」「学校段階に応じた指導方法」「意欲を生み出す」など、外国語学習方略に関するものが多く含まれる。生徒を英語学習成功者へ導くためには年齢や、動機づけといった学習方略を理解し、効果的な指導法ができる必要がある。具体的に動機を高めるにはどうしたら良いのだろうか。次の章では外国語学習方略を概観し、動機付けを中心に、英語教師に求められる力、具体的にすべき実践、必要なものを議論していきたい。

## 3. 外国語学習方略

学習方略とは、Oxford (1990a)によると、学習者が採用する特定の学習のための行動で、学習をより簡単、楽しく、速度を上げ、自律的、効果的にし、新しい場面へ応用できるようにするためのものであるが、竹内 (2010:34) は学習段階といった複雑な要素を考慮してつぎのように定義し

ている。

外国語学習の際に学習者がとる方法・行動などの中で、ある学習段階において、特定の活動に単独あるいは組み合わせて利用されると、活動の遂行や対象言語の習得が容易になったり、効果的になったり、効率的になったりする可能性を持ったもので、学習者によって意識化できるものをいう

英語教師として学生はもちろん、自分自身をも英語学習者として成功させるために、学習方略を理解し、実践できることは教師の授業力向上に不可欠であるのは明白である。学習者要因の総合的な解明と外国語学習における個人差の問題に取り組む竹内（2012）の『外国語学習方略論』のシラバスから、日本の学校での英語指導環境と特に深い関係があると思うものに焦点を置きながら具体的に考察していきたい。

### 3.1. 外国語学習方略の内容

学習者要因の総合的研究をめざす『外国語学習方略論』シラバスから学習者要因の内容を示すと概ね次のようになる。理論的背景を理解しながら、最新の情報を知り、自分の指導環境に合わせた学習方略を授業に取り入れ、方略の有効性を研究することは日本の英語教育の質をさらに向上するのに貢献できる。

- 1) コミュニケーション方略(Communication Strategy)
- 2) 開始年齢(Age)
- 3) 適性(Aptitude)
- 4) 性格(Personality)
- 5) 不安(Anxiety)
- 6) 学習スタイル(Learning Style)
- 7) 信念(Belief)
- 8) 動機づけ(Motivation)

1) コミュニケーション方略とは、自分の能力の不足を補うために自分の持っている能力で最大限利用して、パフォーマンスを上げる言語行動のことである。コミュニケーション方略を教えるには発話を書き出し、意識して練習することなどが有効である。

2) 開始年齢に関しては、自分の指導している学習者の年齢に応じた最適な活動や指導法を取り入れることが可能になる。臨界期仮説により、大人より子供の外国語学習の利点が高められることが多いが、どちらにも利点があり、あまり気にする必要はない。子供には音声を中心にマネをさせ、集中しやすい利点を生かした指導、大人には体系的な規則を理解させながら、動機を高め、自らの意志で積極的に学習できるように指導していくことが効果的である。

3) 学生に「自分には英語学習に対する適性はない」と言われても、諦めることはない。適性は外国語学習とは無関係と考えられており、大人、中高生と、自分の指導している学習者の年齢に合った適性試験を受けさせ、生徒の潜在能力を実感させるように指導すれば動機づけが可能である。

4) 様々な性格があり、それぞれの性格にあった授業構成が考えられる。しかし、多様な学生で構成されたクラスに合うように、一つのパターンにするのではなく、多様なものを取り入れた授業にすることが良いと考えられる。

5) 日本人の98%が不安や心配をする遺伝子を持っているという研究結果(中村、1997)があり、世界的にみても外国語教育に対して不安が強い(西田、1986,1988)、(西田、他、1989)というのは納得できるだろう。しかし、適度な不安は有益であり、不安は測定することができ、教師として不安解消のためにできることがあり、すべきである。それは①練習、②評価基準をきっちり知らせ、③時間を十分与え、④複数させる、チャンスを与えることである。

6) 学習者には自分の好む学習スタイルがある

が、学習者に自己分析をしてもらい、より適切な学習スタイルを示すことができる。また、学習スタイルは変えることが可能であり、学習者に合わないものでも慣れさせ、あえて変えさせることも必要である。

7) 信念は思い込みであり、外国語能力とつながっている。自己評価とつながっており、否定的な信念(思い込み)は学習にも否定的な影響が出やすいため、早めにつぶす必要がある。信念を変えるには正しい科学的根拠を与え、実例を示し、成功体験をさせることが有効である。

8) 動機は様々な要因からできており、人によって違っており、強さ、長さも異なる。動機を維持し続けるためには①成功体験を与え、②学び方を教え、③励まし、④不安を下げるが必要である。また、Keller(1983)の ARCS モデルによると、良い授業は4つの要素でできており、①声のトーンを変えるとといった、注意をひきつけ、②学生の興味と関連性があることをさせ、③自信をつけ、④満足を与えることが必要となる。このモデルで教師として自分の授業分析をすることは学生の学習を進ませる第一歩であろう。動機づけを理解し、学生が英語学習者として成功するように授業実践を向上していくことは英語教師にとって不可欠なことである。動機づけを、英語教師に求められる力として内容を確認し、教師の観点から考察していきたい。

#### 4. 動機づけ

動機づけは外国語学習者を成功へと導く、学習者要因の一つである。古くから注目を集めながら、その複雑な要因から、測定が困難だとされていた。現在では量的測定に加え質的分析も行われ、教師に関連した研究を含め、新しい研究が広がっている(JACET SLA 研究会, 2006)。

##### 4.1. 動機づけ研究の歴史と展望

動機づけ研究は、言語教育、応用言語学、心理学という三分野にわたる研究である。

動機づけの基礎は Gardner and Lambert (1972) によって英語とフランス語の2つの国語を持つカナダでカナダ政府の支援も受けて築かれた社会心理学的モデルである(Dörnyei, 2003a)。しかし、90年代には教育心理学、認知心理学に基づいた新しい概念導入が必要とされ、道具的・統合的動機という二分類では説明できない多様な動機説明に対して様々の研究が行われてきた。近年では認知心理学に基づく、内発的動機(intrinsic motivation) や外発的動機(extrinsic motivation) のあり方にも注目が集まっている。

第二言語習得と外国語習得における動機づけの概念としての違いも Dörnyei (1990) がハンガリーで英語を外国語として学ぶ学習者を対象にした動機づけ研究をきっかけとして衆目されるようになった。さらに、Dörnyei (1994), Oxford and Shearin (1994) 他によると、動機づけの中身を分析する時代は終わり、動機づけを実際の授業でどのように活かすかに焦点が移ってきていると論じている。動機づけとグループ学習の有効性であるグループ・ダイナミクス(group dynamics) との関連や研究者と教師の動機づけをめぐる認識の違いも指摘されている。

動機づけの研究方法に関しては、動機の強さを数値に換算して回帰分析する従来の量的手法だけでなく、質的研究の重要性も指摘されている。最近では Bess (1997)のように、教師が教えることに対して持つ動機にも焦点があてられており、動機づけ研究の枠組みはより大きな議論、研究が行われている(JACET SLA 研究会, 2006)。

##### 4.2. 動機づけとは

Gardner による社会心理学的なモデル分野では動機には外発的動機(extrinsic motivation) と内発的動機(intrinsic motivation) があり、外発的動機には統合的志向(integrative orientation) と道具的志

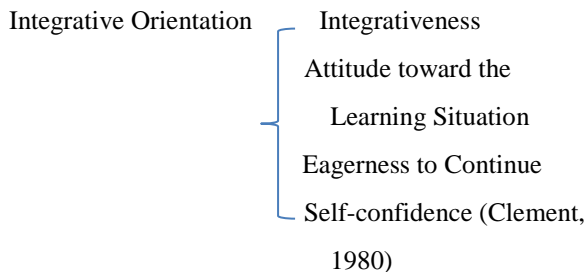
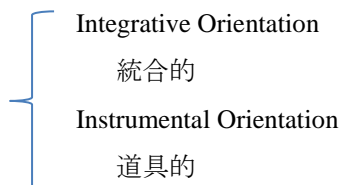
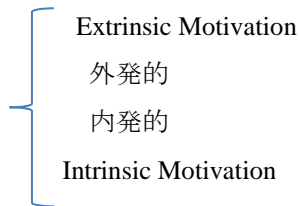
向(instrumental orientation) の2種類がある。統合的動機には①integrativeness, ②attitude toward the learning situation, ③eagerness to continue, ④self-confidence (Clement, 1980) がある。

(1) 社会心理的なモデル

Gardner, R.C.

Socio-Psychological (Socio-Educational) Model of Motivation

Motivation



(2) 自己決定理論とフロー理論

(内発的が一番) (はっきり目的地が見えていと反応がすぐ見える)

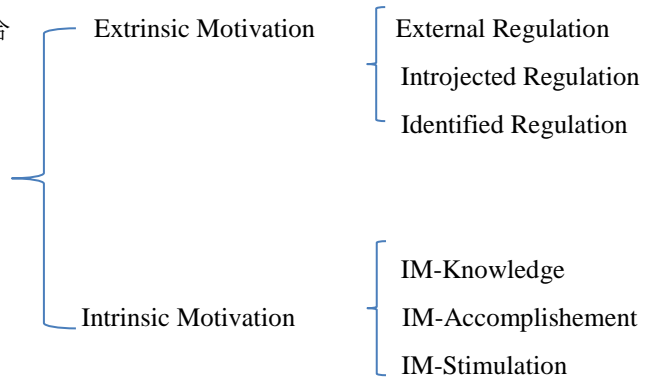
活動そのものが目的となるような動機づけ、

Deci, E., & Ryan, R.M. (1985)

Intrinsic Motivation

3つの欲求(自律、自己効力感、関係性) (3つ高まると内発的動機が高まる)

Self-Determination Theory (自己決定論)



Cf. Demotivation(動機低下)vs.

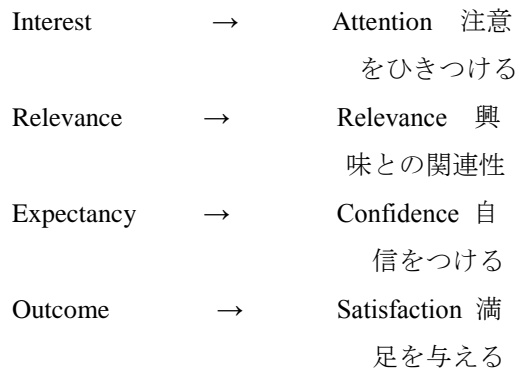
Amotivation(動機なし)

intrinsic

(3) 教育実践学的なモデル

Keller (1983)

ARCS Model of Motivation 良い授業は4つの要素でできている



Dörnyei (2001)

Process Model of Language Learning

Motivation どうすれば動機づけが高まるか

Motivation を維持し続けるためには

- 1) 成功体験を与え、やれば出来ると思わせる
- 2) 学び方を教える
- 3) 励まし、フィードバック

4)	科学的根拠を与え、不安を下げる	大学	97 人 48.5 %
Incentive (褒美) に関する研究		中学・高校	76
1)	メリハリをつける		38.0
2)	突然もらうと効果的	小学校	27
3)	むずかしいものを答えた時は思いっきりほめ、間違えた時はなぜ間違えたか教える	外国語学校	13.5 84
		個人的に指導	32.0 58
5.	英語教師に求められるもの		29.0

具体的な動機づけを日本の英語授業でどのように実践できるかを探るために、Dörnyei の論文を中心に教育実践学的見地から考え、日本での英語授業実践に向けて、英語教師に求められるものについて考察してみたい。

#### 5.1. 英語授業と動機づけ

英語学習者の動機づけに関して、まず、実際に調査した研究から動機づけを考える。Dörnyei (1998) によるハンガリーでの英語教師を対象にした論文と、Chen and Dörnyei (2007) による台湾での英語教師対象の研究から英語指導での動機づけを基に、日本における英語授業での方略に向けて考えていく。

##### 5.1.1. ハンガリーでの英語教師対象の研究

この研究では、小学校から大学までの様々な状況で指導しているハンガリーの英語教師 200 人（女性 151 人、男性 47 人、未確認 2 人）を対象にしている。教師の経験も 1 年未満 6%、10 年以上が 34% である。12% にあたる 24 人の研究対象者は英語のネイティブである。

研究対象者 200 人（英語教師）の勤務機関

-----  
\*複数の機関で指導している教師の可能性あり

方法は教師の方略に関する経験について 2 つに焦点をあてて調査したものである。

1) 動機づけ方略をどの程度重要視しているか、  
2) 実際にどの程度その動機づけ方略を使っているか、である。2 つの質問紙にはそれぞれ同じ動機づけ方略を含み、7 段階で「重要でない」から「非常に重要である」、「今までほとんど使わない」から「とてもよく使う」、まで教師の過去の経験を尋ねたものである。調査参加者は 2 つの内、いずれか一つの質問紙のみに解答した。「重要性」質問紙は 116 人、「頻度」質問紙の参加者は 84 人である。事前のパイロットテストには 20 人に参加してもらい、言葉使いや方略が変更された。最終的な動機方略は 51 あり、教師の背景情報を引き出す個人的な質問も含まれている。どちらの質問紙も使用された言語は英語である。

集められたデータは似たもので分類され、信頼性分析手法によって確かめられた。重要性和頻度項目は標準化されたスコアを使って比較された。この実験データ結果から「言語学習者を動機づける十戒」つまり、最も重要な 10 個のマクロ方略、が最終的にまとめられた。

-----  
言語学習者を動機づけるための十戒 最終版

1. Set a personal example with your own behavior. 教師が学生の良きモデルとなれ！
2. Create a pleasant, relaxed atmosphere I the classroom. 不安なき楽しい雰囲気を作れ！
3. Present the tasks properly. 学生の興味を持つタスクを使い！
4. Develop a good relationship with the learners. 学生と良いラポートを築け！
5. Increase the learners' linguistic self-confidence 言語に対する自信をつけろ！
6. Make the language classes interesting. 授業が面白いと学生に言わせろ！
7. Promote learner autonomy. 学習効果・成果は自己責任とする自律的学習者にせよ！
8. Personalize the learning process. 学生個人を知り、学生にあった学習にせよ！
9. Increase the learners' goal-orientedness. ゴール設定を強化せよ！
10. Familiarize learners with the target language culture. 英語に親しみをもたせよ！

囲であり、多くの教師が異なる学校や機関で指導している。台湾の様々な地域からデータを集め、地域的片寄をなくすよう配慮されている。教師の指導経験は1年未満が4%、20年以上の経験が48%である。およそ4分の1が海外での指導経験を持っていた。全員が台湾人であり、ネイティブはいない。

研究対象者 387 人（英語教師）の勤務機関

大学	54 人	12.1 %
高校	156	35.2
中学	141	31.8
小学校	50	11.2
塾	14	3.1
個人的に指導	20	4.5
職業学校	8	1.8

外国語学習方略は変化しており、絶対化できるものではない。また、この結果はハンガリーでの調査結果であり、一般化するには不十分である。他の文化でも実施する必要がある。

「頻度」に関する調査結果からは「ゴール設定」が無視されている傾向があり、動機づけに有効であるとされる学習目標の設定を、授業でしっかり実践してから学習させる必要がある。また、教師の生徒への影響の大きさを考えても、教師自らがモデルとなるように促進することが重要である。

#### 5.1.2. 台湾での英語教師対象の研究

台湾での研究対象者である英語教師は 387 人で、内訳は女性 330 人、男性 49 人、不明が 8 人となっている。勤務先は小学校から大学の広範

\*複数の機関で指導している教師あり

方法はハンガリーでの調査を基に、その調査と同じように、教師の方略に関する経験について2つに焦点をあてて調査したものである。

1) 動機づけ方略をどの程度重要視しているか、  
2) 実際にどの程度その動機づけ方略を使っているか、である。2つの質問紙にはそれぞれ同じ動機づけ方略を含むが、回答に使用するスケールの数はハンガリーでの調査と異なり、6段階になっている。重要性に関しては「重要でない」から「非常に重要である」、頻度に関しては「今までほとんど使わない」から「とてもよく使う」、まで教師の過去の経験を6段階で答えるように尋ねた

ものである。調査参加者は2つのグループに分けられ、いずれか一つの質問紙に解答した。「重要性」質問紙は176人、「頻度」質問紙の参加者は211人である。質問紙に使われた方略はハンガリーでの調査で使用されたが含まれている。事前のパイロットテストには19人に参加してもらっている。ノッテングム大学の英語教育の大学院生である。最終的な動機方略は48あり、ハンガリーでの調査といくつかの視点で異なっているが、同じような広い動機づけの観点に焦点を当てている。質問紙の大部分は郵送を利用して行われた。

集められたデータは似たもので分類され、信頼性分析手法によって確かめられた。記述的統計は結果を要約し、10のランクでまとめるためにコンピューターで計算された。重要性と頻度項目は標準化されたスコアを使って比較された。

この実験データ結果からいくつかの興味深い結果を得ることができた。10にまとめられた方略の信頼性分析では、すべてのまとめられた方略と両方のスケールタイプからも平均値 Cronbach Alpha が 0.70 という数値がでた。態度調査とは異なり、この質問紙は教師の教育実践を調査するためにデザインされたと言える。項目は教師の思いや考え、というより、実際に教師が行った行動に関するものが含まれており、CA 数値の低さを説明していると言える。

ハンガリーでの調査結果 [言語学習者を動機づけるための十戒 最終版]

1. Set a personal example with your own behavior.  
教師が学生の良きモデルとなれ！
2. Create a pleasant, relaxed atmosphere in the classroom. 不安なき楽しい雰囲気をもて！
3. Present the tasks properly.  
学生の興味を持つタスクを使え！
4. Develop a good relationship with the learners.  
学生と良いラポートを築け！
5. Increase the learners' linguistic self-confidence  
言語に対する自信をつけろ！

6. Make the language classes interesting.  
授業が面白いと学生に言わせろ！
7. Promote learner autonomy. 学習効果・成果は自己責任とする自律的学習者にせよ！
8. Personalize the learning process. 学生個人を知り、学生にあった学習にせよ！
9. Increase the learners' goal-orientedness.  
ゴール設定を強化せよ！
10. Familiarize learners with the target language culture. 英語に親しみをもたせよ！

台湾での調査結果 [言語学習を動機づけるためのマクロ方略上位十戒]

1. Set a personal example with your own behavior.
2. Recognize students' effort and celebrate their success.
3. Promote learners' self-confidence.
4. Create a pleasant and relaxed atmosphere in the classroom.
5. Present tasks properly.
6. Increase the learners' goal-orientedness.
7. Make the learning tasks stimulating.
8. Familiarize learners with L2-related values.
9. Promote group cohesiveness and set group norms.
10. Promote learner autonomy.

最も重要な10個の動機づけマクロ方略の結果は上記のとおりである。同じ結果のものもあれば異なるものもある。「教師が学生の良きモデルとなる」項目は台湾でも学生に対して最も影響の大きいものである。大きく異なる点は、台湾で2位になった学生への努力に対する褒美や反応が、ハンガリーでの調査では上位10に入らなかったことである。台湾では学習過程における学生の努力への重要性が英語教師に認識されていることがわかる。



ハンガリーでの調査と台湾での調査結果から、生徒の自律認識が台湾では低いという差などがあるが、動機づけ方略は文化や民族を超えて有益なものであるというのがわかる。英語教師として授業に積極的に取り入れることが授業改善に役立つ。

## 6. 日本の英語授業での実践

ハンガリーでの調査と台湾での調査結果から、外国語学習に有効な動機づけ方略をみてきたが、日本の英語教育現場を見ていきたい。日本では英語は外国語であり、日常生活の中で英語を使う機会はほとんどない。外国語科目として英語が圧倒的に学習されている。台湾と同じように学習への努力に対する評価が高いと考えられる。塾や、大学入試といった受験の影響も大きい。理想と現実に悩む英語教師は多く、中高の英語教師のための勉強会、研修会で授業実践の矛盾に悩む声を聞くことも多い。Sugita and Takeuchi (2010)から日本の英語授業実践現場において調査された動機方略の研究結果を見て日本の英語教師ができること、求められるものを考えてみたい。

### 6.1. 調査結果

この研究は日本の中学校で英語教師が実際に15の動機づけ方略を使い、自己申告の形でこの動機づけ方略の使用結果についてまとめたものである。期間は2か月で、京都の公立中学校の2年生と3年生を指導する5名の日本人英語教師が参加した。5名のうち4名は女性である。指導経験は1年から27年である。方略の使用頻度は授業のすぐ後に報告することで測定された。

生徒の動機づけに深く関連があると思われる方略

- 1) Apply continuous assessment that relies on measurement tools other than pencil-and-paper tests.
- 2) Regularly include tasks that involve the public display of students' skills.
- 3) Encourage learners to attribute their failures to lack of effort.
- 4) Assess each student's achievement (improvement) not by comparing with other students but its own virtue.

この研究から、15の動機づけ方略から生徒の動機づけに有効と考えられたものはたったの4つであった。また、いくつかの方略の効果については生徒の英語能力によって差があるということがわかった。どの動機づけ方略を使用するかや、調査方法の他、動機要因の複雑さを考えると調査研究は困難であるが、研究で有効とわかった方略はどんどん授業に取り入れることが必要であると言える。

### 6. まとめ

英語は世界の共通語であり、グローバル化の進む現在、学習者を英語が実際に使えるよう指導することが英語教師に強く求められている。英語教師を取り巻く環境はますます厳しくなっているが、外国語学習には学習者の個人的な差、社会的環境など、様々な要因があり、簡単ではない。英語教師に求められるものが多い中で、学習者の動機づけは学習者を成功者にすることができる有効な方法である。英語教師に求められる条件を理解し、自らを向上させることが必要である。

高専の学生には英語を苦手とする学生が多いように聞き、実際にそういう学生をみた。英語はむずかしい、といった固定概念を持った学生が多いように思えた。こういった英語嫌い、苦手意識のある学生に対して今回の動機付け方略から英語教師は多くを学び、自らの授業を改善すること

で英語への苦手意識をなくし、自立的学習者にさせ、英語学習の成功者へと導くことができるようにおもう。少なくとも①教師が学生の良いモデルとなるようにする、②不安のない楽しい雰囲気のあるクラスをつくる、③学生に面白いと思わせる授業を実践する、といったことである。学生の興味のあるタスクを授業に加え、多様な学生にあわせて多様なタスクを組み合わせ、学生の潜在能力を実感させるようにすることである。コミュニケーション活動や授業で英語を使う楽しさを実感した学生は英語に対する抵抗感が少なくなり、少しは英語を勉強する気持ちを持ってくれるかもしれない。自信を持たせ、達成感ややる気をだすように工夫することが必要である。簡単ではないが、グローバル人材育成のためにも、英語教師が自ら成長していくことが不可欠である。

英語教師がまずすべきことは英語教師に求められる条件、力、授業力を理解し、それらを備えるように努力することである。動機付けに関する理解を深め、学習者が英語学習に興味を持ち、自立した学習者となるように日々、授業を改善していくことが重要である。有効な動機づけ方略を理解し、目の前に居る学生にあった方略を実際に授業実践にとり入れることが求められている。英語教師の学生への影響は大きい。人生の先輩としても英語教師は自らも学生の良いモデルとなり、自らの体験も語りながら、自分の学生を将来の英語学習成功者へと導くことができるよう努力を続けることが肝要である。

#### 参考文献

- Cheng, H.-Fu, and Dörnyei, Z. (2007). The Use of motivational strategies in language instruction: The case of EFL teaching in Taiwan. *Innovation in Language Learning and Teaching, 1*, 153-174.
- Dörnyei, Z. (1994). Motivation and motivating I the foreign language classroom. *The Modern Language Journal, 78*, 273-284.
- Dörnyei, Z. (2003). Attitudes, orientations, and motivations in language learning: Advances in theory, research, and applications. *Language Learning, 53*, 3-32.
- Dörnyei, Z. and Csizer, K. (1998). Ten commandments for motivating language learners: Results of an empirical study. *Language Teaching Research, 2*, 203-229.
- JACET (大学英語教育学会) SLA 研究会 (2006) 『文献からみる第二言語習得研究』, 東京: 開拓社
- 金谷憲 編著(1995) 『英語教師論—英語教師の能力・役割を科学する』 東京: 河源社
- 久保信子 (1997). 大学生の英語学習動機尺度の作成とその検討 『教育心理学研究』, 45, 449-455.
- Mizuno, C. (1999). *English Language Education in Japan from the teachers' point of view: For better English teaching*. 神戸市外国語大学卒業論文
- 久村研、神保尚武 (2007) 「英語教師に求められる力—行動計画から免許更新制へ」 『英語教育』 第 57 巻第 4 号、10-13
- Sugita, M. and Takeuchi, O. (2010). What can teachers do to motivate their students? A classroom research on motivational strategy use in the Japanese EFL context. *Innovation in Language Learning and Teaching, 4*, 21-35.
- Tsuchiya, S.(1995). *Eigoka Kyouikuhou Nyumon*. Tokyo, Kenkyusya
- 竹内理 (2010) 『より良い外国語学習法を求めて』 東京: 松柏社
- 竹内理 (2012) 『外国語学習方略論シラバス』, 関西大学院授業資料関西大学大学院授業資料